いしのうへ［前編］

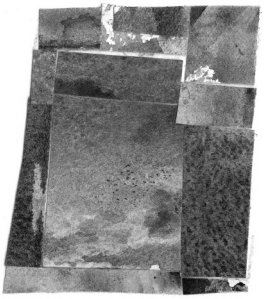
木澤　千

北村亜矢子は、ケアマネージャーとして赴任した老人ホームで、看護学校の先輩・向井と高校時代の教師・伊達と再会する。三人は肉親の最期を看取れなかった苦い記憶を抱えていた。介護と看取りを巡って、三人の人生が交叉する

一、再　会

川岸の駐車場に立つと、川面を渡る四月の風が心地よく吹き上げてくる。さざ波が朝の陽ざしに輝きながら揺れている。風に乗って鳥の囀りが心地よく耳に届く。

せせらぎ園は、河口近くの高台にある認知症対応の小規模老人ホームである。



亜矢子はクリーム色の園舎を見上げた。坂道の両側に並ぶ満開の桜が風に揺れ、花びらが肩に舞いおりた。

亜矢子は大きく深呼吸をして坂道をのぼり始めた。

「おはようございます。北村と申します」

「向井から聞いていますよ」

受付の女性が介護支援室に案内した。

「久しぶり、よく来てくれたね。嬉しいわ。さ、入って」

室長の向井が手をあげて亜矢子を迎えた。

「お世話になります。よろしくお願いします」

「助かるわ、看護現場の経験のあるスタッフが欲しかったの」

向井は亜矢子と同じ看護専門学校の六年先輩にあたる。

亜矢子は看護学生の頃、看護研究サークルに参加していた。『ナイチンゲール看護覚え書』をはじめ看護に関する本の輪読、看護症例記録の検討、春夏の休みには離島や無医地区での健康調査のフィールドワークなど活発に活動していた。向井たちの世代が学生時代に立ち上げたサークルで、向井は卒業後も病院勤務の傍ら、研究例会に時々顔を出して学生たちの活動をサポートしていた。

向井の実家は亜矢子の家のある町から国道を南下した県の西部にある。同郷ということを知って、亜矢子は何かにつけて向井に相談し慕っていた。

代表の久保田に紹介された。元公立病院の看護部長の経歴がある。

「先日お話しした北村亜矢子さんです」

「向井さんの後輩ね。頑張ってね」

「よろしくお願いします」

運営主体は社会福祉法人せせらぎ介護センターで、せせらぎ園の他に市内全域に、「そよかぜの里」、「みどりの里」、「デイサービスそよぎ」の三つの施設とヘルパーステーションを運営している。

向井は園内を案内しながらスタッフに亜矢子を紹介した。デイサービスの部屋は開放的で、利用者は思い思いにテレビを観たり横になったり、折り紙や刺繍をして過ごしている。

「おうちで過ごしてきたように過ごしてもらうことを大切にしてるの。どこのデイルームも大家族の居間っていう感じなのよ」

向井は少し自慢げに言った。

亜矢子は看護師として病院に勤務した後、せせらぎ園に来るまでの二年間を、出身地の社会福祉協議会でケアマネージャーとして働いていた。

午後、向井がファイルを差し出した。

「早速だけど二時から一件、新規の入所希望者の家族との面談があるのだけど、目を通しておいて。あなたに担当してもらうわ」

亜矢子は書類に目を落とした。

入所予定者は伊達恭子、年齢七十九歳。右大腿骨頸部骨折で三カ月の入院後に認知症を発症していた。歩行機能も低下しており、要介護3に認定されている。

申請者は伊達克之、年齢四十八歳とあった。家族欄の続柄には娘婿とあり、他に家族の記載はなかった。申請者の名前にどこか覚えがあった。

午後、向井とともに訪問した。伊達克之の家は園から車で七、八分ほどの川の対岸にある。玄関を上がって左側の、庭に面したベランダのある洋間に案内された。テーブルを

挟んで三つの籐の肘掛け椅子がある。亜矢子は向井と並んで座り克之と対面した。

やっぱり伊達先生だ……。

「先日はご足労いただいてありがとうございました。早速ですが……」

克之は、時々奥の部屋から聞こえてくる声に返事をしながら、向井の説明を聞いている。介護用ベッドに義母の恭子が横になっていた。

ひと通りの説明を終え、克之からの質問に答えた向井が亜矢子を紹介した。

「伊達様を担当するケアマネの北村です。どんなことでも気兼ねなく相談してください」

克之が必要書類に署名している間、向井と亜矢子は垣根に沿って造られた花壇に色とりどりの花が咲いているのを眺めた。

「素敵な花壇ですね」

向井が言った。

「見よう見真似でやってますけど、枯らしてしまったのもあるんです」

克之が苦笑いした。

その笑い顔に亜矢子は先生に間違いないと思った。

「それでは明後日、十時にお母様をお迎えにあがります」

助手席から亜矢子が声をかけた。サイドミラーの中で頭を下げている克之が見えた。

初日の仕事を終えてアパートに戻ったのは、午後六時をまわった頃だった。まだ未整理のままの引越しのダンボール箱を開けて、高校の卒業アルバムを取り出し、教師の集合写真を探した。

写真の克之は色黒で体格もがっしりとして若々しかった。

亜矢子は中学校を卒業すると、家から電車でふた駅先にある私立の女子高校に入学した。二年生に進級した時に赴任してきた数学の教師、それが伊達克之だった。

亜矢子のクラスでの最初の授業で、克之は黒板にチョークで大きく『いしのうへ』と書いた。自己紹介で名前を書くのかと思っていた生徒たちは驚いて顔を見合わせた。

「いしのうへ先生？」

ざわつく生徒をよそにポケットから一冊の文庫本を取り出した。そして腰に手を当てて、「三好達治、いしのうえ」と、声に出して詩を読み始めた。

数学の先生がどうして詩の朗読なの？ と生徒の中に騒（ざわ）めきと戸惑いが広がった。クスクス笑う者もいた。

「いい詩でしょう、ぜひ皆さんも読んで下さい。文庫本の『三好達治詩集』に載っています」

それから自己紹介をして数学の授業を始めた。
この詩は、全学年すべてのクラスの最初の授業で朗読された。たちまち学校中の話題になり、克之は石の上先生と渾名された。
「ねえねえ、伊達先生って養子結婚なんだってよ」
ある時、亜矢子のクラスの友人がどこからか聞いてきて言った。
「へえ、だったらあの詩は、石の上にも三年ってことわざと関係あるのかなあ」
「養子だから何か辛抱してることがあるんだよ、きっと」
「やっぱり石の上先生なんだ」
みんなで笑い転げた。他愛ない女子生徒の冷やかしだった。亜矢子もこの輪の中にいて一緒に笑った。
亜矢子は最初の授業で詩の朗読を聞いた時、きっとロマンチックな先生なのだと思った。一旦そう思うと、授業のたびに素敵に思えてきた。亜矢子は克之を初恋の人と勝手に決めて、遠くから憧れ続けた。
三年生の最初の数学の授業でも、克之は『いしのうへ』を生徒に読み聞かせた。亜矢子は夢見心地で聞き、最初の四行だけ小さな声で朗読に合わせた。克之が一瞬、自分の方を見たような気がした。
それからというもの、亜矢子は校内で克之とすれ違うたびに、胸をドキドキさせながら口を押さえて、ククッ、と笑った。克之は変わった笑い方をする生徒だと思った。克之はどこの学校に赴任しても生徒から陰で石の上先生と呼ばれていたので、笑われてもさして気にもしなかった。
ある時、亜矢子は廊下を走っていて克之に叱られた。
「廊下は走らない！」
こう言って亜矢子の頭をポンポンと叩いた。亜矢子は嬉しくて、家に帰って何度も頭をさすった。
亜矢子のこの初恋は卒業とともに終わった。

高校生時代の懐かしいエピソードだった。
亜矢子は別のダンボール箱を開いた。あった。克之に初めて詩を読んで聞かされた日、下校時に本屋に立ち寄って買った『三好達治詩集』だった。

甃（いし）のうへ

あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うららかの跫音（あしおと）空にながれ
をりふしに瞳をあげて
翳（かげ）りなきみ寺の春をすぎゆくなり

み寺の甍(いらか)みどりにうるほひ
廂(ひさし)々に

風鐸(ふうたく)のすがたしづかなれば
ひとりなる
わが身の影をあゆまする甃(いし)のうへ

二日後、恭子を迎えに行った。

園の送迎車に乗せた後、新しく作った名刺を渡した。

気づくかも知れないと思ったが、克之は黙って受け取り、胸のポケットにしまった。

「今月からお母様のサービス利用の書類を持って伺います。月の後半になりますが、都合の良い曜日があれば連絡をください」

そう伝えて、車椅子の恭子に付き添った。

「よろしくお願いします」

ドア越しに頭を下げた克之に恭子が手を振った。

亜矢子は訪問の前日には、対象となる入居者や通所者を介護している施設を訪れて、スタッフからこの一カ月間の利用者の様子を聞き取り、詳しく家族に伝えるように心がけた。入居者の家族からは喜ばれた。良い心遣いだと向井は評価したが、特に親切に接したわけでもなく、亜矢子にとっては業務の一環でしかなかった。

訪問先での家族との面談は移動時間を除くと三十分がせいぜいで、それでも家族からの相談や要望などがあれば、時間内に終わることは滅多になかった。

日中はデイサービスを利用し、夜間自宅で介護している家庭では、車椅子からの移乗やオムツ交換から、マヒのある人への着替えのさせ方や褥瘡(じょくそう)予防の体位変換、起こし方などを実地に教えることもあった。看護師としての経験が役に立った。

克之の家には、毎月第三金曜日の午後に訪問することになった。

予定日を希望する電話がかかってきた時、克之が高校教師を辞め、市内の進学塾で数学の講師をしていることを知った。

亜矢子は、利用者にとって直接問題になる事情以外では、家族のことには深入りすべきではないと思っていた。園に来るまでに亜矢子の身に起こったことが気持ちに深い影を落としていた。だからいつもベランダか玄関で入居中の恭子の様子を知らせ、翌月の利用計画を説明した。

克之は亜矢子を、細かい点まで丁寧に心配りする、仕事のできる人だと思った。しかし、どこか人との関わりを避けているように、ふと感じることがある。ほとんど笑わな

いことにも引っ掛かっていた。
室長の向井もまた、同じような印象を亜矢子に抱いていた。
向井は亜矢子が就職した時から、看護学校時代の底抜けに明るい性格と独特の笑い声と仕草が、すっかりなりを潜めていることを心配した。支援室でのミーティングもそつはないが、今一つ事務的に過ぎる面が気になった。入所者やデイサービスの通所利用者など、要介護者・家族と施設を結ぶ役割を果たすうえで、亜矢子の淡々とした仕事ぶりには、どこか人を寄せつけない雰囲気を感じていた。
「北村さん、どうですか？」
久保田が向井に聞いたことがある。
「仕事はキレるんですけど、私の知っていた北村さんとはどこか違っていて……人が変わったというか……」
向井はいつか聞かなければとは思っていたが、聞きあぐねていた。
「病院時代かケアマネ時代に、何かあったのかしらね……しっかり援助してあげてね」
久保田が言った。
一年が経った――。
その日も克之に通常通りの説明と利用票への確認をして、次の訪問先に向かおうとした時、克之が亜矢子を呼び止めた。
「北村さん、少し時間いいですか？」
「何でしょう」
ベランダから上がって籐椅子に座った。
亜矢子は、てっきり教え子だったことを思い出したのだと思って、少し身構えた。
「実は、塾では生徒から進路相談を受けることもあるのですが、ある女子生徒からケアマネージャーになりたいと相談がありました。それで少し話を聞かせてもらえたらと思って」
「いいですよ、お役に立つなら」
ホッとして胸をなでおろした。
「ケアマネさんって、正式には介護支援専門員というんだそうですね」
克之はそう前置きして相談内容を説明した。
亜矢子は、受験には医療か介護の現場での五年以上の経験が必要なこと、それさえあればどんな職種の人でも受けることができること、などを話した。
「お医者さんでも薬剤師さんでも？」
「そうですよ。でも看護師や介護士の経験を経て資格を取る人が多いですが」

その後、仕事の内容のことや就職先についての質問があり、亜矢子は簡単に受け答えした。
「そうすると、その生徒には、まず医療か介護の現場で働ける資格を取るように勧めることが先ですね。どうもありがとう」
「いいえ、少しはお役に立てました？」
亜矢子が立ち上がると克之が言った。
「ところで、北村さん、どうして看護師からケアマネに替わったんですか？」
突然の質問に戸惑った。再び椅子に腰掛けた。鼓動が速くなった。
克之は亜矢子の名刺をテーブルに置いて言った。肩書きに看護師・介護支援専門員とある。
「何か特別な理由があってのことですか？」
「特に何故かといわれても……」
「夜勤などで体調を崩したとか？」
「それはありません。看護師の仕事は好きだったんですけど……」
せせらぎ園に就職する以前に自身に起こった出来事の記憶が甦って、口ごもった。何とかやり過ごしたかった。
「退院する患者さんで元気に帰宅される方は良いんですけど、介護が必要でどこか別の施設に移す必要があるとなると、なかなか難しくて」
まずは取り繕った。
克之は頷きながら亜矢子を見つめた。それは亜矢子を落ち着かなくさせるような視線だった。
「そういうケースは結構多くて、その後の継続的な医療というか、介護できる所への橋渡しがうまくいかなくて、悔しい思いをすることもあって……」
克之は時々亜矢子の方に目をやって、頷きながら聞いていた。
「これからお年寄りが増える中で、もっと介護面でのフォローが必要になってくると思いました。看護師として患者さんに向き合うのも嫌いではなかったのですが……」
「で、今どうですか？　やりがいはありますか？」
「あります。でも、思っていた以上に大変です。特に重度の認知症の方は、ご自分でああして欲しい、こうして欲しいと、訴えることが難しいですから……」
亜矢子はまるで面接を受けているような気分だった。
「ご家族の希望や受け入れ施設の状況をうまく調整して、介護計画を立てるんですけど、ケアマネとしてご家族との関係も大切になります」
「家族との関係までですか？　大変ですね」
「ええ、大切なことなんですけど……」

途中で言葉に詰まった。家族との関わり方について、これ以上突っ込まれたくなかった。口にしなければ良かったと思った。

「そうですか。お引き止めして申し訳なかった」

「こんな答えで良かったんでしょうか」

ホッとして克之宅を後にした。

克之は、確かに理にかなった説明だとは思った。しかし一般的で淡々とした事務的な答えには、どこかしっくり来ないものを感じていた。生き生きと仕事をしている人が持つ、特有の思いの強さや熱意が、今ひとつ伝わってこなかった。卒業して社会人になった生徒と会う機会も少なくなく、潑剌（はつらつ）と語る仕事への意欲に触れて嬉しくなったものだ。亜矢子にそれが感じられないことが、やはり気になった。

この一年、月に一回訪問を受けていて、その淡白な受け答えに、漠然とではあったが、亜矢子の中に壁があると感じていた。正確には、自ら壁を作って何かから自分を守っているのではないかと思えた。

亜矢子に尋ねたのには理由があった。克之はその頃、あることを真剣に考え始めていた。

園に戻る道々、運転しながら亜矢子は克之に悪いことをしたと思っていた。話を聞く克之の様子から、通り一遍の応答に納得していないことを、うすうす感じ取ってはいた。

一方で少し嬉しくもあった。ケアマネの仕事など誰からも気にかけられたことはなかったし、人に喋ったのも初めてだった。

仕事が終わり、夕闇の中、川岸の土手を走る道を上流方向にアパートに向かった。川にかかる橋の入口に三叉路の交差点がある。赤信号で停車して、何気なく川の方を眺めた。信号が変わり、少し先で堤防の車寄せに停めた。

対岸の街灯と家々の灯りが川面に落ちている。何本もの長い光の帯になって川の流れで揺らめいている。

きれい……。

いつも疲れてただ通り過ぎるだけで、川の風景がこんなに美しく見えたことは一度もなかった。

せせらぎ園に来てからというもの、がむしゃらにひたすら仕事だけに没頭してきた。自分が何も変わっていないことに気づいてもいたが、変わることを恐れた。少しは変わろうともしたが、いつも心がすくんだ。

看護師を辞めてケアマネージャーになり、せせらぎ園に来た本当の理由……亜矢子には思い出したくない過去がある。次から次へと頭に浮かんできた。